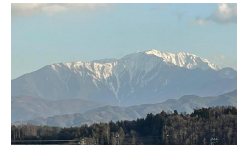


ああ 遠くの空は 晴れている



NO14

南箕輪村教育委員会

本村では、各学校において「温かい学級づくり」に力を入れて取り組んでいます。

今回紹介する、岩崎 宏章氏の「1つのグループで行こうよ」の提言は、どんなに時代が進んだとしても、不易な部分として、日々の学級づくりにおいて大事にしていきたい内容であります。

(※教育指導時報・・・長野県教育委員会事務局が県内の教職員対象に発行している教育雑誌です)

1つのグループで行こうよ

岩崎 宏章

小学校二年生になったばかりの教室で、春の遠足のグループづくりが行われた。グループの数は六つという条件で、自由に仲間集めをすることがいいということになった。教室は普段みせたことがない程の目の輝きと動きをみせた。

暫くして、手を取り合って歓声をあげる輪があちこちに出来た。

しかし、M君だけが一人ポツンと立っている。促されて彼は「僕を誰も入れてくれない。」と訴えたのだった。

再び静寂。
「M君の言ったこと、わかった?」「……………」
静寂を破って一人が言う。「だって、M君は乱暴するんだもん。」
再び静寂。

長い長い静寂を破ってT子さんが言う。「だけどもさあ、A子ちゃんの金魚が死んだことがあったでしょう。あの時、M君がお家から同じようなのを持ってきてA子ちゃんにあげたよ。」

普段は元気の塊のようなM君が、ワッと泣き出した。

しかし、どのグループからも「入れてあげる」との声は掛からない。優しくさだめてあるよと訴えたT子さんでさえ「どうぞ」とは言わない。金魚をもらったA子さんも下を向いて黙ったままである。

沈黙。

子供たちの心の中に、「乱暴だし、自分勝手なM君はグループに入れたくない。」との思いと「M君だって優しいところがある。入れてやるべきだ。」との思いが広がって、沈黙させている。絶対矛盾する我と汝の相剋の中で、二人の自己の統一を求めて、子供たち一人一人の内面に激しい戦いが繰り広げられている。それが沈黙を生んでいる。

一方M君の内面では、優しいところがあるとの言葉を契機として、優しく素直なM君が、他人のことなど考えないで振る舞うもう一人のM君に「乱暴すると他人は受け入れられないよ。」と語りかけている。まさに自問の沈黙である。あと数分で授業も終わる、この時間に結論が出なくてもよい、と決断した時であった。MT君が静かに挙手をした。

「ねえ、一つのグループで行こうよ。」

一瞬、何のこともな、と躊躇する私をよそに子供たちは進めていく。

「じゃあ、グループを作らないことと同じじゃないの?」

「え? 違うと思います。一つのグループを作るんだと思います。」

「そうだよ。」

春の遠足は、一つのグループで行くことにまとまった時、チャイムが鳴ったのだった。

問題行動に対する総合的な対策や道徳力の向上が再び浮上している。具体的な対策はと問われて、ふと右記のことが思い出されたのであった。

善い自分が悪い自分に勝つ自己否定こそ求められているなら、善い自分を強くすればよい。自律の構造であり、よく行う自己の確立である。そのためには、内面に平衡論理の統一過程を構築し、自分にとっても周りにとっても気持ちの良い高次の妥協を多く体験させることであると思うがどうか。

そういえば、警察に補導された生徒を父親と引き取りに行った時、父親が、「俺のやりてえことをすんなりやりやあがって。だがな、俺は、やりてえことを我慢しているんだ。このバカモノが。」と息子に言ったことを思い出す。

(義務教育課長)

平衡論理・・・自己と他者、事物の3者間の関係性がプラス（好意）とマイナス（否定）の積でプラス（バランス）になる状態（+++、+--）を好み、不均衡を解消しようとする認知の心理。

高次の妥協・・・二者の妥協点を探った上で、単なる平均ではない、双方にとってより良い解決策を導き出すこと。

